

柳田國男の著作と著述

——書物の寄贈に寄せて——

田
中
正
明

一 はじめに

この度、成城大学民俗学研究所のご理解をいただき、長年手元に置いて教示を得、裨益を受けていた「柳田國男の著書・著作を収載している書冊」を、同研究所に寄贈をさせていただくことと致しました。

単行の著書を主とし、様々な全集や叢書の中の一冊として刊行されるなど、柳田國男の著書・編著書、更には口述などが収載されている書冊で、時代は明治三〇年代に出版された『抒情詩』『山高水長』『美文 散文 白砂青松』『韻文 花天月地』『クロンウエル』（著者 松岡國男）と記されていますが、田山花袋に名前を貸したもので、花袋の著作と考えられています）『最新 産業組合通解』『農政学』などの書目を嚆矢とし、大正期に力を尽くした「甲寅・炬辺・炬辺・第二」叢書、『民間伝承』など一部の雑誌を加え民俗学へと続いた一四〇〇冊余り。

年齢を重ねると共に、所蔵をしているこれら一連の書冊を無為にすることのないように、引き続き利用や活用を意図していただける場（先）をと模索をしていた者として、成城大学民俗学研究所とのご縁とご理解とは、誠に得難く、有難いことだと思っております。

これらの書冊の多くは、日々の営みの中で書店の店頭で偶然に、あるいは新聞等に掲載をされている新刊書の広告を見て、入手をしたものも少なくありませんが、その多くは折々に古書店をめぐり、あるいは定期的に開催されている古書の即売会の「目録」や即売会場で目にし、購入をした書物が少なくありませんでした。東京に居住し、千代田区内に永く勤務先があった者として、神田神保町の多くの古書店、頻回に開催される古書展の展示即売会は、未知・未見の書冊と出会うことが可能难得難く貴重な場となっております。

因に、古書の展示即売会は、「和洋会古書展」「書窓会 まど展」「東京愛書会 愛書」「ぐろりや会」「趣味の古書展」「下町古書展」（以上 会場は「東京古書会館」）、「五反田遊古会」「本の散歩展」（以上 会場は「南部古書

会館」、「西部古書展書心会」（会場は「西部古書会館」）など、勤務を終えた帰路自然に足が向いていた次第です。有り体に言えば、集書が目的であつたわけではありません。振り返ってみますと、このような歩みの中で折々に求めた書冊は、民俗学と周縁の書目が多かつたのですが、柳田國男の書目も二百冊・三百冊と冊数を増すこととなりました。そうした中で、次第に「柳田國男の著書・著作を収録している書冊」そのものへの関心が高まり、更に時日を重ねるのに伴って、叶うことならば過去に公刊された書冊も、現今出版されている書物と同様に、直接手にあるいは目にしてみたいとの思を有するようになったのです。

しかしながら、当時原書冊について言及をしている目録や紹介記事は、僅かを知るだけであつたのです。

『炉辺叢書解題』編者柳田國男 郷土研究社

二四頁本と三二頁本とがあり、共に刊行年月日の記載はありませんが、「柳田國男識」と明記をした同文の「炉辺叢書刊行趣意」の文末に、二四頁本は大正一三年一月、三二頁本には大正一四年七月、と記されています。

『柳田國男著 遠野物語 増補版 批評紹介集録』郷土研究社

刊行年月日の記載はありません。金田一京助・長野稲男・水野葉舟・胡桃沢勘内・市川信次・守隨一・田山花袋・神代種亮・周作人の文が、続いて四一八名の「遠野物語直接購読者芳名」が掲げられています。著名な研究者の名も少なくありません。

『柳田先生著作年譜（一）』水木直箭『旅と伝説』三月号 昭和六年三月 三三元社

明治二四年〜大正六年の書目が掲げられています。

『柳田先生著作年譜（二）』水木直箭『旅と伝説』六月号 昭和六年六月 三三元社

大正七年〜大正一五年の書目が掲げられています。

「柳田國男先生著作目録」鷺尾三郎「陳書」第五号 昭和一〇年一月 神戸陳書会

「柳田國男先生御著作中昭和以前のものは曾て旅と伝説第四年第三号及第六号誌上に水木先生が掲載して居る、のでこ、では昭和以後のものを蒐めてみた 鷺尾三郎」

『柳田國男先生 著作目録』編者 水木直箭 昭和一〇年一〇月 大阪民俗談話会

「柳田國男先生還暦記念講演会が、大阪朝日新聞社後援の下に行われるについて、お集りの方々に先生の著作目録をお目にかけたらといふので、急に幹事の方から原稿作製を命ぜられたのであるが、時日の余裕もないため、自身の手控えをそのまゝ印刷することとした 水木直箭」

『柳田國男 批評集』昭和一五年七月 創元社

同社から刊行された諸書について、齋藤茂吉・伊藤信吉・高群逸枝・岡崎義恵などの批評を掲載しています。（その限りでは著作目録ではありませんが一助と考へ記しました）

「柳田先生著作目録」森山太郎『書物展望』復刊号（第十五卷・第一号）昭和三三年六月 書物展望社

なお、手元にある当該書は、柳田國男旧蔵本で、表紙右上に赤ペンで「家に保存する分」との書き込みがあります。

「後記 柳田先生の著作年表をまとめるべく目下鋭意資料の発掘獲得に努めておりますが、地方の新聞や雑誌や、特殊な限定出版のものなど、とても私私きが一人で駆廻つたとて得られるものではありません。書物展望の復刊に富り、少雨莊老に勧められるの余り、とりあへず戦後の分のみを御笑覧に供する次第、切に御叱声を賜らん事を」

「柳田國男著書目録」「日本古書通信」第二二二号 昭和三七年九月 日本古書通信社

『展示とフィルム』柳田國男先生を偲ぶ『出品目録』昭和三七年一月 成城大学

昭和三七年八月八日に逝去した柳田國男を偲び、縁の深い同学園の学園祭で実施をした展示に備えて作成さ

れました。著書・蔵書・雑誌などが掲載されています。

『柳田國男方言文庫目録』西村亨 昭和三十九年七月 慶應義塾大学言語文化研究所

「この文庫は昭和十九年五月に柳田國男先生から当時慶應義塾語学研究所のために慶應義塾へ寄附された書物と私が個人的に柳田先生からいただいたものなどから出来ています。この文庫の内容は方言と民俗に関する貴重な文献とノートであります 西脇順三郎」

『やしの実から『海上の道』へ *柳田國男文献目録』一九七五年 三省堂

柳田國男生誕百年記念として、刊行されました。現在入手可能な本、絶版・品切本、全集。続けて柳田國男研究、民俗学・文化人類学としての柳田学、文学としての柳田学、思想史の中の柳田國男、雑誌、の項目ごとに、柳田研究に資する書目を記しています。

『柳田國男著作・研究文献目録—柳田國男没後二〇周年記念—』柳田國男研究会編 昭和五十七年五月 日本地名研究所

「この「目録」は、一九七二年、東京高田馬場に設けられたいわゆる野の学び舎「寺小屋教室」の一研究講座「柳田國男研究講座」のまる一〇年にわたる「柳田國男伝記研究」のささやかな成果をベースとして作成されたものである。(略) 柳田國男没後二〇年間における、柳田國男研究文献を、全面展開の単行本および一論稿収録の単行本ならびに特集雑誌を網羅して、柳田國男研究の今後の展開の便とした 後藤総一郎」

他にもあると思いますが、以上が手元にあるすべてなのです。その後、

『定本柳田國男集』（別刊第五 昭和四十六年五月 筑摩書房 定本柳田國男集編纂委員会。同定本集全巻の「総索引」「書誌」「年譜」を収録）

『民俗学関係雑誌文献総覧』（編者 武田旦 昭和五三年一月 国書刊行会。民俗学関係雑誌、二四一誌の目次を収録。本文八〇三頁 索引一〇一頁）

『日本民俗学文献総目録』（昭和五五年五月 日本民俗学会。本文一四三五頁・付録〔民俗学定期刊行物一覽・民俗学関係著作集〕二八頁）

など、有用・有効な大部の書目が続くこととなりました。しかしながら、この時点でも耳目に入った限りでは、柳田國男の著書・関係書を主軸とした書冊は存在をしていませんでした。

二 『日本民俗学』会誌より

以下の文章は、『日本民俗学』（第一七三号 昭和六三年二月 日本民俗学会）に収載された拙稿「柳田國男著作小考」の末尾の部分と、同じく『日本民俗学』（第一九二号 平成四年二月 日本民俗学会）に収載された「柳田國男『著作目録』小考」の初めの部分です。些か冗長ですが、転記をしたいと思います。

□「柳田國男著作小考」（第一七三号）

柳田は、この時代の日本が生み出した高邁な啓蒙思想家であった。しかしながら、旧来の研究史を辿ると、柳田を日本民俗学との関係で捉えることに精力を尽くしてきたように思われる。とはいえ、柳田には顕在化し、広く喧伝されている以外の部分があることを忘れてはならないのであり、このためこれからの柳田研究は、これまでの枠組みを越えて大きく踏み出す必要があるのではないかと思考されるのである。日本人とは何かを問い続け、一人ひとりの精神と生活を豊かにすると共に、それに応えられる社会を構築することを自

らの使命としたという柳田の全体像に迫ることは容易ではないが、そのために柳田の残した膨大な著作物に触れることは極めて有効な方法であろう。とはいえ、方法論としてはこれが如何に正しくとも、実際にそれを具現することは不可能と言わざるを得なかった。このため、それに次ぐ方法として、公刊された単行本や編さん物、あるいは監修や校訂をした著作物に依拠することを提起したのである。

柳田は出版された一冊一冊に「小序」「自序」「序」「第二版序」などの序文を付し、あるいは「跋文」を載せて、それぞれの書物の主題や経緯について言及していることが多く、更に取り上げた主題について、研究者が今後向かうべきことどもについて示唆を与えていることもあった。このためまとめられた著作物を検証することによって、柳田の歩んだ足跡や志向した意識が那邊にあったかを知ることのできるのである。

しかして、先学の努力によって、膨大な著作物に即し、既に幾多の「書誌」や「著作目録」が作成され、研究者や利用者の便に供されてきた。これらの目録の中には、柳田の強い意思を投影したものがあつたが、仮に、意向を受けない場合でも、等しく日本民俗学を基底に据えて編まれている。このような結果、ともすると民俗学とその周縁に属する書目のみが、照射をされてきたのである。因に、かく記している筆者も日本民俗学にえにしを有する者で、従つて本稿もまたこの枠組みを越え得るものではなかつたと自省している。

柳田國男は、稀代の啓蒙思想家であつた。近時民俗学の枠を越えた論文集が編まれたり、復刻されたりしているが、それぞれの分野の活躍に即した論文集や作品集が、引き続き編さんされ公刊されることが望まれるのである。それと共に、民俗学関係以外の著作物をも網羅した、簡便な「著作目録」が公刊される必要があるのではないであらうか。明日の柳田國男研究を真に発展させ、柳田國男が意図したように日本人が自国のことをより正しく理解するために、また柳田國男の著作物の有効的な利用を促進するために、切に望まれるのである。

□「柳田國男『著作目録』小考」(第一九二号)

柳田國男著の著作目録としては『定本柳田國男集』(別巻五 昭和六十四年五月 筑摩書房)に収められた「書誌」が最も詳細を極めている。同集は三六冊に及んだ同定本集の最終巻で、前回配本の別巻四以来六年半の歳月を費し、また柳田の没後およそ九年の歳月を隔てて刊行されたものであった。

「書誌」に付された「凡例」によると、「一、この書誌は柳田國男の全著作を、発表類、刊行順に配列したものである。原稿および手稿は執筆の年月によって配列した。なお、発表年月日が明らかでないものは、年度の終わりにまとめて掲げた。一、抄録・一部抜粋のかたちで各種の叢書類に収録されたものは省いた。一、没後に出版された編纂物・文庫などは一切省略した。(以下略)とあり、同書誌が収録対象とした範囲が明示されている。七七頁に及ぶ大部の書誌であるが、同巻に添えられている「月報」によると、一朝一夕に成ったものではなく、水木直箭をはじめ沢田四郎作・大藤時彦・鎌田久子など多数の研究者の永年にわたる成果を踏まえ、初めて可能であったことを窺うことができるのである。

柳田の八十有余年に及んだ全生涯と業績は、日本民俗学に留まることなく、周知のように極めて広い範囲にわたっている。この点に関しては、筆者もまたかつて公にした「柳田國男著作小考」(昭和六十三年二月『日本民俗学』第一七三号)の中で、「それ故柳田國男に歌人、詩人、農政学者、大学講師、官吏、編集者、論説委員、言語学者、国語学者、エスペランチスト、政治思想家、旅行家、講演家、更に教育家などといった修辭を冠したとしても、的はずれということにはならないであろう。柳田こそは、この時代の日本が生み出した高邁な啓蒙思想家であった」と記したことがあった。

しかして、^レ柳田ブーム[〃] ^レ柳田学[〃] などといった語が用いられるようになって久しく、今日このような柳田の多方面にわたる活動領域や思想を照射した研究は盛んで、多くの研究者が成果を問うべく著した優れた論考や著作が、陸続として公にされているのである。『柳田國男伝』(後藤総一郎監修 柳田國男研究会編著

一九八八年一月 三一書房）や、同じく後藤総一郎編になる『柳田國男研究資料集成』（第Ⅰ期全一〇巻・別巻一卷 昭和六十一年六月 第Ⅱ期全一〇巻・別巻一卷 昭和六十二年四月 日本図書センター）は大部の労作であり、今後の研究に資するところは大きいと考える。

しかしながら、このように数多い論考や著作も、これを柳田の著作を対象としたいいわゆる著作目録とか書誌、あるいは書誌学的な成果ということに限定すると、それは他の分野に比して劣っていることを認めざるを得ない。筆者は先に公にした「柳田國男著作小考」の中で、この点について言及し、柳田が論考や報告を発表した雑誌は膨大な数量に達しており、実際問題としてこれら大部の数の雑誌を閲覧することは不可能である旨を指摘し、反面柳田の単行本は一部の書き下ろした書目を除いて、このようにして既に発表した論考や記事を集めて一本とすることが多かったという特質を踏まえた時、学問研究に資するため、単行本や編纂書を主体とした「著作目録」が早急に整備され、公刊される必要を述べたのであるが、その後も事態は大きく変わっていないように思われるのである。

前の稿は、二五頁から成る最後の部分、後の稿は一八頁から成る初めの部分で、意図している事柄が理解していただけるか否か心もとないのですが、昭和から平成の時代に推移をした頃の、私自身の認識でした。

三 柳田國男の文庫・叢書

書誌とは異なりますが、八十有余年に及ぶ柳田國男の軌跡を主題とした書物や研究書は、昭和三十七年八月の没後、早い時期から編まれ現在に至っても絶えることはありません。内容は、生涯を、人との繋がりを、思想を、研究史を、更には個別に設けたテーマを主軸として等々。因に、私の書棚にもこのように類別でき、書名に、柳

田國男¹を冠した書物や研究誌が二〇〇冊を超えて並んでいます。繰り返しになりますが、一冊一冊の書物の背や函に記されている書名や副題からも、著作者の方々の柳田國男に寄せた主意や抱いた関心事が、如何に多様であるかを伺い知ることが出来るように思われるのです。

加えて、近時出版されている類書は気鋭の研究者の成果に触れることが出来る得難い場となっていますが、早い時期に公刊された書物の著者は柳田國男のもとで研究活動に携わり、周縁で示唆を受け、或いは独自に勤しまれたなどと態様を異にしていますが、柳田と時空を同じくし、故人となられた研究者が著わされた書冊の中には、生前の柳田國男の警咳に接しているかのような記述を見出すこともあり得るかも知れません。

個人の著作ではありませんが、

『季刊 柳田國男研究』（昭和四二年～昭和五〇年 季刊柳田國男研究、白鯨社、八冊）

『柳田國男研究資料集成』（後藤総一郎編、一九八六年～昭和六二年、日本図書センター 別巻共二冊）

『柳田國男研究年報』（後『柳田國男研究』と改題、柳田國男研究会編著、一九九六年～、三一書房・岩田書院・梟社、五冊）

『柳田國男事典』（平成一〇年 編集委員 野村純一・三浦佑之・宮田登・吉川祐子、勉誠出版）

『柳田國男研究論集』（二〇〇二年～、柳田國男の会、六冊）

などの書目や雑誌も有用な書冊とされます。

大部の著作集・定本集・選集・全集などは後に言及することとして、柳田國男の著作は数多くの文庫（本）の中でも、刊行をされています。著作が含まれている文庫名と、刊行年（数冊ある場合は最初の一冊の）と出版社を記しますと、

- 「名家文庫」(東京 大学館 明治三二年)
- 「続帝国文庫」(東京 博文館 明治三六年)
- 「日本児童文庫」(東京 アルス 昭和四年)
- 「帝国文庫」(東京 博文館 昭和五年)
- 「春陽堂少年文庫」(東京 春陽堂 昭和七年)
- 「玉川文庫」(東京 玉川学園出版部 昭和八年)
- 「岩波文庫」(東京 岩波書店 昭和一三年)
- 「和泉郷土文庫」(大阪 和泉郷土文庫 昭和一四年)
- 「百花文庫」(東京 創元社 昭和二一年)
- 「ワールド文庫」(東京 蓼科書房 昭和二四年)
- 「社会科学文庫」(東京 三省堂出版 昭和二四年)
- 「学友文庫」(東京 芝書店 昭和二四年)
- 「朝日文庫」(大阪・東京・小倉 朝日新聞社 昭和二五年)
- 「角川文庫」(東京 角川書店 昭和二六年)
- 「創元文庫」(東京・大阪 創元社 昭和二六年)
- 「市民文庫」(東京 河出書房 昭和二六年)
- 「知識文庫」(東京 ポプラ社 昭和二七年)
- 「のじぎく文庫」(神戸 のじぎく文庫 昭和三四年)
- 「久松文庫」(鳥取 久松文庫 昭和三七年)
- 「東洋文庫」(東京 平凡社 昭和四二年)

「新学社文庫」(東京・京都 新学社 昭和四四年)

「新潮文庫」(東京 新潮社 昭和四八年)

「旺文社文庫」(東京 旺文社 昭和五〇年)

「講談社学術文庫」(東京 講談社 昭和五一年)

「春陽堂少年少女文庫」(東京 春陽堂書店 昭和五五年)

「ポプラ社文庫」(東京 ポプラ社 一九七九年)

「ちくま文庫」(東京 筑摩書房 平成元年)

「ちくま学芸文庫」(東京 筑摩書房 一九九二年)

「講談社文芸文庫」(東京 講談社 平成一七年)

「角川ソフィア文庫」(東京 角川学芸出版 KADOKAWA 平成二五年)

管見に入った文庫は以上です。付言しますと、ここに掲げた「文庫」とは、本の版形の所謂「文庫本」「文庫版」だけを、意味しているわけではありません。各出版社が「文庫」を冠したシリーズ名をも含むものなのです。様々な趣意のもとに編纂された各種の体系(大系)や研究集成の中に、柳田國男の論考や啓示が収録されていることは枚挙にいとまがありません。

同様に、柳田國男を代表者・同人・編輯(纂)者・監修者として公刊された、叢書・全集・研究書なども少なくありません。試みに関与の有様と、出版社・刊行年(数冊から成る場合は最初の一冊の)とを記しますと、

「真澄遊覧記」(代表者 三元社・郷土研究社 昭和四年)

「言語誌叢刊」(同人 刀江書院 昭和五年)

「郷土科学講座」(監修者 四海書房 昭和五年 一二冊が予告されていましたが一冊で終わりました)

「全国方言集」(編者 中央公論社 昭和一六年)

「全国昔話記録」(編者 三省堂 昭和一七年)

「日本民謡大観」(監修者 日本放送出版協会 昭和一九年)

「世界むかしばなし文庫」(監修者 彰考書院 昭和三三年)

「全国民俗誌叢書」(監修者 三省堂出版・刀江書院 昭和二四年)

「日本のむかし話」(監修者 実業之日本社 一九九五年)

「日本昔話記録シリーズ」(編者 三省堂 昭和四八年)

書目は以上の通りですが、他に企画を主導をしたり、出版に関わった場合も少なくなかったのです。同様に関与をした叢書名や全集名と、刊行年(数冊から成る場合は最初の一冊の)と出版社・出版元とを記しておきます。

「甲寅叢書」(東京 甲寅叢書刊行所 大正三年)

「炉辺叢書」(東京 玄文社 大正九年)

「炉辺叢書」(東京 郷土研究社 大正一一年)

「第二叢書」(東京 郷土研究社 大正一五年)

「女性叢書」(東京 三国書房 昭和一七年)

「日本民俗学のために」(東京 民間伝承の会 昭和三二年)

「社会科叢書」(東京 三省堂出版 昭和二四年)

「中学生全集」(東京 筑摩書房 昭和二五年)

- 『民俗学研究』（東京 日本民俗学会 昭和二五年）
 『新嘗の研究』（東京 創元社・吉川弘文館・協同出版 昭和二八年）
 『稲作史研究叢書』（東京 農林省農業総合研究所・財団法人農林協会 昭和三二年）
 『現代紀行文学全集』（東京 修道社 昭和三三年）
 『諸国叢書』（東京 成城大学民俗学研究所 昭和五九年）

更に、

- 『民俗学辞典』（監修 東京 民俗学研究所 東京堂・東京堂出版 昭和二六年）
 『綜合日本民俗語彙』（監修 東京 民俗学研究所 平凡社 昭和三〇年）

柳田國男の没後の書目ですが、それに続く、

- 『日本を知る事典』（東京 社会思想社 一九七一年）
 『民俗学文献解題』（東京 名著出版 昭和五五年）
 『民俗の辞典』（東京 一九七五年 岩崎美術社）

は、多くの方々や研究者に多大な示唆や恩恵を与えてくれている書冊と思います。

なお、『日本民俗学辞典』の嚆矢は、中山太郎（著作者 背文字と函には編と記されています）による本文八六八頁、類従索引五三頁からなる同名書で、昭和八年に昭和書房から、また二年後の昭和一〇年には、『増補 日本民俗学辞典』（昭和一六年に再版 編者 本文三九八頁、類従索引三二頁）が梧桐書院から刊行されています。二書共に巻末に短文の「餘白録」が記されていますが、後者のそれを転記してみますと、

▽辞典の編纂刊行されることは、慥にその学問を普及する上に、重要な役割を務むるものだと考へてゐる。さう云ふ意味からも、辞典の編纂は注意の上にも注意せねばならぬ事が多い。

▽それであるのに、私の粗笨なる事志と違ひ、今度も材料の整理が厳密を欠き、行文冗長に過ぎ、説明が独断に傾き、誠に不十分事のみ多く、漸愧に耐えぬ次第である。たゞ此の辞書が幾分でも学問の普及に役立てば幸甚である。

▽今後の私は、なまじ下手な論文や考証などの執筆は棄て、この辞典の大集成に専念するのが、却て学問に忠実なるものであると考へる。或はそれが私に課された使命かも知れぬ（編者追記）。

その日から数えておよそ六五年、民俗学研究所編著『民俗学辞典』の刊行から五〇年、を費やした一九九九年と翌二〇〇〇年に大部の『日本民俗大辞典』（上・下 吉川弘文館）が出版されることとなりました。総項目六三〇〇、執筆者六〇〇余名。最大最新の民俗辞典・民俗学の全領域を網羅・民俗語彙を多数収めた立体的構成・充実した索引など。加えて両書に、六四頁に及ぶ民俗写真の頁が挿入されていることも特筆されるのではないかと思われるのです。

四 著作集・定本集・選集・全集

柳田國男の著作・著述は、大部の著作集・定本集・選集・全集としても刊行をされています。

□『創元選書』（東京・大阪 創元社）

刊行の趣旨を掲げた中で、「良書の普及こそは身を出版にささげる者の片時も忘るることを得ない責務である」

「将来日本の文化建設の礎石とならんことを切望してやまぬ」と記しています。その限りでは柳田國男の選集でも全集でもありませんが、『昔話と文学』（昭和二三年）が第一冊に収められ、戦前一四冊、戦後四冊の書目が公刊されるなど、関係は小さくありませんでした。付言をしますと、出版に当たった著者と出版社の熱誠さはなかなかのものであったのです。

なお、その旨を小谷方明がその著『大阪の民具・民俗志』の中に記しています。柳田の意識が那邊にあったかを窺うことができ興味深いので記してみたいと思います。

昭和十三年ごろと思うが、柳田先生のお宅を訪問した折、たまたま話が出版のことになった。私は「先生が創元選書にばかり次々と著作を出されるので、私たち近畿の仲間では、創元選書でなく柳田選書や、と申ししております」と申し上げた。すると先生は、創元選書は、当時一番良心的とおっしゃられ、次のように話された。「書物というものは一冊でも多く、大勢の者に読んでもらわねばならぬ。そのためには読みやすいように、用紙や活字の組み方、それから本の価格をなるべく安くして、読者が買いやすいように考えねばならぬ。本を書くということは、自分が受けた学恩を社会へお返しをすることである。自分が知ったことを書いて、次の世代の人がその上にまた学問を積み上げていく。それが文化というものだ」と。

□「柳田國男先生著作集」（東京 実業之日本社）

本著作集は「柳田國男先生著作集刊行会」の編纂になるもので、昭和二年から二八年にかけて、一二冊が刊行されました。最終巻となった第一二冊の巻末に既刊の書目を掲げて、「以下続刊」と明記されており、続く出版計画があったものと判断されます。因に、昭和二年は、昭和九年から三百回あまり続いた木曜会が

発展的に解消をした記念すべき年でした。

□「定本柳田國男集」(東京 筑摩書房)

別巻二巻を加え、三六巻から成る大部の著作集。編集の方針に関しては、「本集には、柳田國男先生八十余年の業績が網羅されております。但し先生の強い御意向により、収録されなかったものが若干あります」(同定本集内容見本パンフレット)の文言にも窺うことができますように、柳田國男の主導の元に編纂が進みましたが、刊行の時期は最晩年に当たっており、生前に出版されたものは昭和三十七年一月に公刊された第二巻を嚆矢とし、七巻を数えるだけ。年月を隔てて、昭和四十六年五月に刊行された、別巻第五が最終巻でした。

□「柳田國男選集」(東京 修道社)

本選集は、八冊から成っています。これまでに同社が出版をした単行書を中心として、改めて編纂をして、昭和四十七年から四十八年に刊行されたものです。

□「新編 柳田國男集」(東京 筑摩書房)

先に同社から刊行された「定本 柳田國男集」を底本として同定本集の編纂時に意向を踏まえて除外をされた作品や談話筆記などを加え、一二巻に再構成され、昭和五三年から五四年に刊行されました。

□「ちくま文庫 柳田國男全集」(東京 筑摩書房)

文庫本による「柳田國男全集」で、平成元年から平成三年にかけて刊行されました。それぞれの巻末に「編集付記」を付し、「本文はできるだけ読みやすくするため、著作権者の了解を得て現代かなづかいによる表現

に改め、一部の漢字をかなに変え、送りがないを付した。ただし、詩、短歌、俳句、古語、民俗語彙は底本のままにした。」と注記を付しています。全三三冊。

□「柳田國男全集」(東京 筑摩書房)

一九九七年二月の第二巻を初出とし、全三六巻、別巻二巻から成る大部の著作集。単行本は発行順に編集。底本には初版を使用し、口絵・目次・写真・地図等をも収録。のちに著者自身が加えた増補・改訂・削除などはすべてを明らかにする。詩・短歌などの文学作品、単行本未収録の著作。更に、未発表原稿、書簡・日記も可能な限り収録する等を趣旨に掲げ、現在「別巻一年譜」を含む三六冊が刊行されています。

五 著作目録と朱筆書き入れ本

以上、柳田國男によってもたらされた膨大な知見や業績の一端に触れ、併せて説かれたり示されたりした知見を後代に向けて継ぎ送るための力を尽くされて来た、あるいは現在なお努力を続けられている出版社や研究会などの営為の一端を記しました。

元より厚顔の誇りは免れませんが、後学の一助になればと考え、これまでに私が著した柳田國男の著作・著作目録等に触れた愚稿と、所蔵をしている柳田國男自身による書き入れ本の、書き入れの一部とを次に記させていただきます。

「柳田國男著作小考」(『日本民俗学』一七三号 昭和六三年二月 日本民俗学会)

「遠野物語が生まれたところ」(『谷中 根津 千駄木』其の十八 一九八八年二月 谷根千工房)

「井上通泰と『遠野物語』——柳田國男の初期著作の印行をめぐって——」(『日本民俗学』第一七七号 平成元年二月 日本民俗学会)

「柳田國男「著作目録」小考」(『日本民俗学』第一九二号 平成四年十一月 日本民俗学会)

「大学人としての柳田國男——講義録の検証を中心として——」(『日本民俗学』第一九八号 平成六年五月 日本民俗学会)

「田中増蔵と今井甚太郎」(『谷中 根津 千駄木』其の四十二 一九九五年三月 谷根千工房)

「田中増蔵(聚精堂)と今井甚太郎(杏林舎)——柳田國男の初期著作の印行をめぐって 補遺——」(『日本民俗学』第一二〇四号 平成七年二月 日本民俗学会)

「井上通泰と『遠野物語』——柳田國男の初期著作の印行をめぐって——」(『柳田國男『遠野物語』作品論集成』Ⅳ 一九九六年六月 大空社)

「柳田國男の初期著作の刊行をめぐって 杏林舎」(『50 years NEWBORN』平成九年三月 杏林舎)

「柳田國男の旅と書目」(『伊那民俗研究』第八号 一九九八年九月 柳田國男記念伊那民俗学研究所)

「柳田國男の書物——構成と成立の過程を中心として——」(『伊那民俗研究』第一一号 二〇〇二年三月 柳田國男記念伊那民俗学研究所)

「柳田國男と啓蒙活動」(『史料が語る 大正の東京一〇〇話』つくばね舎 二〇〇二年七月)

「柳田國男の著作集・全集・論集」(『柳田國男研究論集』第一号 二〇〇二年二月 柳田國男の会)

「所蔵 柳田國男自著朱筆本校訂一覽」(『伊那民俗研究』第二二号 二〇〇三年二月 柳田國男記念伊那民俗学研究所)

*訂正本は『退読書歴』(昭和八年 書物展望社)

「序」の前に「自」を加筆。鉛筆と赤ペンを使用し、助詞の変更、句読点の訂正など六〇二箇所(訂正や加

筆が加えられています。

「所蔵 柳田国男自著朱筆本校訂一覧」〔『伊那民俗研究』第三号 二〇〇四年二月 柳田國男記念伊那民俗学研究所
*『ひなの一ふし』（昭和五年 郷土研究社）
七箇所。

*『一目小僧その他』（昭和九年 小山書店）

中表紙裏面の右上に、次のように朱筆されています。

「定本計画 ○索引ニモ誤植多シ ○訂正アリ ○フリガナ必要カ 文庫ノ改訂モ之ニヨルヘシ ○改版ニ
ハモットワカリヤスクスル」尤モ惜シイノハ魚王行三伝」。

表現を改めたりルビを付記するなど、本文・索引四五四頁の内二七六箇所ルビを付したり加筆や訂正を行っています。

*『日本の祭』（昭和一七年 弘文堂書房）

四分の一に切った藁半紙が挟み込まれており、訂正をすべき事項が赤ペンで記されています。

「一二六頁 三行ト四行「日向大隅では…からなど、いふ。」まで（四行終マデ）

コノ一條ハ誤リニ付 左ノ如ク訂正シテアトヲ組ミカヘタシ

「一二六頁 三行「日向大隅では…以下四行マデヲ」六月水の神の祭月とするのは、全国農村の一般の風であるが、其の中でも四国は殊に顕著であり、之と又河童の災害を防ぐ為と解して居る者も此方面には多い。
ト改メル」

他に、五箇所正誤を指摘しています。

*『毎日の言葉』（昭和二二年 創元社）

表紙と中扉の間に白紙が一枚あり、左下に「コノ系統ノ文章 ニツ三ツ追加スルツモリ コレダケデハア

マリニ見スボラシスギルカラ」。

また最後の頁の左下余白に、「ナホ若干ノ誤植アリ、此次ノ改版ヲ期スヘキ也 二三、一一、一六 柳田國男」と記されています。

〔柳田國男と文庫本―刊行の状況と表記を中心として〕（『柳田國男研究論集』第三号 二〇〇四年二月 柳田國男の会）
 「年譜」「著作目録」（『柳田國男文芸論集』井口時男編 二〇〇五年一〇月 講談社）

〔柳田為正先生の記憶―父柳田國男について書き残し・語り伝えたこと―〕（『伊那民俗研究』第一五号 二〇〇七年五月 柳田國男記念伊那民俗学研究所）

〔「先祖の話」朱筆本校訂一覽―大月松二「柳田國男聴書」を受けて―〕（『伊那民俗研究』第一六号 二〇〇八年一〇月 柳田國男記念伊那民俗学研究所）

＊〔表紙〕 右上 「◎」の印を付記

中央の書名の右肩上 「保存本 書き入れ 再利用」

右下 「訂正スベキ所多シ 此マ、デハ出サヌコト」 三一・九・五記念

＊〔表紙裏〕 各節ノ始メニ二三行ノ要旨ヲノセルカ

○索引ヲ作ツテミル

○資料ノ出処ヲ説明シタラハナホ研究者ニ便ナラン

○本文ハ書キ改メズニ補注ヲ付ケ解説スル方カヨイヤウニモ考ヘム

コレガ最初ノ発想ノ形ナレバナリ ◎空襲下ノ記念 シカシ何分ニモ此表現デハワカラヌ点多シ、大体

ニ説明力足ラズ

○追加資料多シ、何トカシテアレモ利用シタシ 其ノ一トヲ出来ルタケ此ノ本ノ順序ニナラベテ置クコト、

○誤植若干。欠字若干アリ注意

○OR（一案）序文ヲ添へ此ママ文庫本ニスルカ ソノ為ニ一冊ヲノコス

必ズ索引ヲツケル 又附註が必要カ

族制語彙ト一冊ニスルカ

○多くの頁ではありませんが、誤字の訂正、加筆、上部余白への書き入れ、また本文中に傍線を引いた箇所があります。

「時空を紡いで」柳田國男と山崎珉平・矢田部良吉を受けて——『伊那民俗研究』第二三号 二〇一四年五月 柳

田國男記念伊那民俗学研究所

「財団法人民俗学研究所の軌跡——資料の確認を中心として——」（『伊那民俗研究』第二三号 二〇一五年一月 柳田

國男記念伊那民俗学研究所）

「柳田國男の著作物と「内容見本」（『伊那民俗研究』第二四号 二〇一七年二月 柳田國男記念伊那民俗学研究所）

六 『退読書歴』と『一幕物』

柳田國男の著作集・全集・文庫、加えてこれらの主題に関連をした拙考の一端について記してきました。次に、過去に公にした事柄ですが、二つの事例を加えてみたいと思います。

柳田國男の「書物を愛する道」という初出紙誌を、探索をしたことがありました。同稿は『定本柳田國男集』では「文庫について」と改題をされて第二三巻に、また『退読書歴』（柳田國男先生著作集）第九冊 昭和二十五年一月 実業之日本社）、『現代随筆全集』（一 柳田國男・笠信太郎集 創元社 昭和二十九年一月）、『日本随筆・随想集』（『世界教養全集』別巻Ⅰ 平凡社 一九六二年一月）などの諸本に収載されていますが、初出の注記が次のように異なっていました。

*『定本柳田國男集』第二三卷「文庫本について」と改題、同巻の「内容細目」に『書物新潮』一四〇号昭和十年六月十五日とあり、同定本集別巻第五の「書誌」には、昭和十五年六月の箇所に記載されています。

*『老読書歴』初出については、記載されていません。

*『現代随想全集』「解題」に、「昭和十五年四月の雑誌『書物新潮』に掲げられたもの」と記されています。

*『日本随筆・随想集』本文に、「一九四〇年四月『書物新潮』と記されています。

このように諸本に異同があるということは、いずれかが正しく他は誤記ということになります。しかし、『書物新潮』第一四〇号を披見することが出来れば事の正否を確認することが出来るわけで、このために同紙誌を渉猟することとしました。この時点では『書物新潮』は、雑誌であるのか新聞であるのかも判然とはしていませんでした。その後早稲田大学図書館で一部の号を見出し、新聞の体裁をとっていることが出来たのですが、他の主要な図書館で架蔵をしている所はなかったのです。しかしながら、幸いにその後生地兵庫県福崎町の「柳田國男・松岡家顕彰会記念館」において、柳田國男の書物の集書家として高名であった水木直箭の旧蔵資料の中に見出すことが出来、ようやくに思いを果たすことが叶ったのです。それによりますと、第一四〇号は、昭和十五年六月十五日に、大阪市の「書物新潮社」から発行されたものだったのです。

同稿を収載している前記の書目は、いずれも大部の巻数から成り、わが国を代表する出版社の企画出版物の中の一冊で、この点からも細心の注意がはられ決して安易に編纂されたとは考え難いのですが、このような次第であつたのです。

もう一例。柳田國男の旅行に関係した事柄を、記してみたいと思います。

大藤時彦が柳田の旅の特質や主張を主題として、「柳田國男先生と旅」（『柳田國男写真集』所収 大藤時彦・柳田為正編 一九八一年三月 岩崎美術社）と題した回想を公にしていますが、その中に一点極めて些細な事柄ではあ

りますが、誤謬があることを知りましたので、その旨指摘をしてみたいと思います。八〇〇〇字程からなる同稿の文末に、次のように記されています。

終りに先生の旅行についても一つ述べておきたいのは、いつも書物を持って行かれたことである。それも外国文学や洋書がかなり多かった。『北國紀行』の中から拾い出してみると、ブランドスの「アナトル・フランス論」、メレンジュコフスキーの「イプセン伝」、メークルジョンの地理の書、アナトル・フランスの「バルタザル」などいずれも一読しておわると記してある。福井の停車場にて大聖寺の小林区署長菊池喜太郎という文学好きの人の世話になった御礼と思うが、ルネ・バザンの英訳レデムプションを贈られている。これも先生が読むために持参されたものであろう。この時分は地方では本屋は少なくまして先生の行かれた村々にはそんな店はなかったのだから本は持参するよりほかはなかった。旅で買われたのは雑誌ぐらい。金沢では町へ出て森さんの一幕物を買ってきて読むとあるのは多分雑誌に掲載されたものと思う。（以下略）

『北國紀行』は、明治四十年、四十二年、四十三年、大正五・六年、昭和二十三年の旅行の記録（日記）と洞察とを纏めて一本とし、『柳田國男先生著作集』（昭和二十三年十一月 実業之日本社）の一冊として公刊されたものです。傍線を付した部分の記載は、同書の明治四十二年六月十四日の記録（日記）の最終行に「メークルジョンの地理の書を読んでしまひ、町へ出て森さんの一幕物を買ってきて読む。又雑誌も数種」と記されており、これを踏まえていることは明らかで、この部分に関して、簡潔に指摘をさせていただきます。

私事ですが、先年私は柳田為正先生から柳田國男旧蔵の書物を頂戴したことがありました。書名は、『一幕物』。

森林太郎（鵑外）が口訳をした本で、奥付は「明治四十二年六月五日印刷／明治四十二年六月十日発行／著作者 森林太郎／発行者 東京市麹町区飯田町六丁目二十四番地 西本波太／印刷者 東京小市石川区久堅町百八番地

(注 東京市小石川区の誤記) 山田英二／印刷所 東京市小石川区久堅町百八番地 精美堂／發行所 東京市麹町区飯田町六丁目二十四番地 易風社／定価 一円二十銭」と記された、菊判、四二六頁の体裁を有する書物で、最終頁を開きますと左端下の余白の部分に、柳田國男の直筆で、「明治四十二年六月十七日朝読了 金沢客舎ニ於て 柳田國男」と読了をした旨の書き込みがなされておりました。

しかして、この本こそが金沢の町で買い求め、読了をした件の『一幕物』であつたのです。こうして購入をした同書は、八つの短編を集めた四二六頁の書物で、この日の夜と、十五・六日に視察に向かう車中や、夜宿舎などで読み進み、十七日の早朝(注 日記に「早朝に第九師団司令部に行き」とあります)、「明治四十二年六月十七日朝読了 金沢客舎ニ於て 柳田國男」との書き入れになつたのではないかと推察されるのです。

加えて、邪道であることを承知で直後、同書に記された六月十四日の動静を、明治四十二年五月の『汽車汽船旅行案内 第一七六号 全国汽車発着時刻及乗車賃』と照合し、確信を得たのです。

因に、刊行中の『柳田國男全集』別巻一の年譜では、「六月一四日 朝、金沢駅で、八時八分発の汽車に乗り、高岡経由で伏木に向かう(新)。飛騨から流れ運ばれてくる材木などを見るなどして、伏木港の視察を終え、高岡で乗り換え金沢に戻る。高岡での待つ時間に、町を歩き、雑誌や絵葉書などを買う。上松原町の源円に泊まり、メークルジョンの地理書を読む。町に出た時に買った森鷗外訳の『一卷物』や雑誌などを読む。」と、詳細に記述されています。

七 柳田國男の書誌

以上、柳田國男の書誌が編まれることを待望してきた旨を記し、併せて「五 著作目録と朱筆書き入れ本」では、自らの取り組の一端について触れさせていただきました。とは言え、歩みは遅々としたものでした。

手元に、『井上靖ノート』（編纂者 坂入公一 昭和五三年三月 風書房）という書物が有ります。「あとがき」に同書を編むに至った編纂者（著者）の熱い思いと、出版に至るまでの経緯とが記されています。

「井上靖に惚れてかれこれ二十年になります。惚れるという言葉は俗すぎますが、夢中になっている私の場合、ほかの言葉では的確に言い現すことができません」「暇さえあれば古書店地図に印をつけながら、足を棒にして都内の古書店を歩き、井上靖の本を蒐めました。古書展へも欠かさず出向きました」「井上靖書誌」として完璧なものをと念じましたが、独力のかなしさ、思うにまかせませんでした」等々との吐露。

私は、同質の思いを発することは到底できませんが、柳田國男の書誌に寄せる思いは重なります。以下、柳田國男の書誌を意図して公刊した、またさせていただいた書目を記させていただきます。

『柳田國男 書目書影集覧』（一九九四年六月 岩田書院 B5版 六二二頁 書名索引 一二頁）

柳田國男の著書・共著書、論文・記事・作品・談話・書簡などを収めている、全集・叢書・単行書など約四七〇冊を収録しました。表紙（カバー・函）を写真に撮り、奥付を複写をして掲げました。著作集・定本集・選集・編纂書・校訂書・監修書・関係書・文庫などについては書誌を掲げました。書目の多くは、家蔵本によっています。

『柳田國男の書物―書誌的事項を中心として―』（二〇〇三年一月 岩田書院 A5版 四二二頁）

I 柳田國男の著書（柳田國男の著書・書物の著され方・書物の広がり・著作集 全集の刊行の経緯）

II 初期著作の印行（兄井上通泰と『遠野物語』・田中増蔵〔聚精堂〕と今井甚太郎〔杏林舎〕）

III 講義録と教科書（高等教育と講義録・初等中等教育と教科書・教科書の中の柳田國男）

IV 書物と周辺事項（啓蒙思想家としての柳田國男・柳田國男の旅と書目・柳田國男の書簡・柳田國男の著作目録）

『柳田國男と教科書―児童と生徒へのまなざし―』（二〇〇六年四月 開成出版 A5版 一一八頁）

柳田國男と教科書、教科書の中の柳田國男、との二編。加えて柳田國男『日本の社会』の内容見本の冊子の全頁を写真に撮って収めています。

付言をしますと、一九四五年（昭和二〇）の終戦時に七一歳を数えていましたが、戦後新設された二つの教科の教科用教科書の監修者・著作者として二つの会社から迎えられました。即ち、一つは一九四八年（昭和二三）から東京書籍の小・中・高等学校用の国語教科書の監修者として、他は一九五四（昭和二九）からの一時期、実業之日本社の小学校用の社会科教科書の著作者として携わったのです。

戦時中憂悶の日々を送ったこと、戦後一転して新しい社会の建設を目指し献身的な努力を続けたこと、その取り組みや発言は多方面に及んでいること等は言を待ちませんが、慈愛溢れた眼差しを学童に向け、一連の著作活動等を積極的に行なったことをも看過し難いことであつたと考えられるのです。

〔柳田國男の著作・著作収録書 書誌〕〔国立歴史民俗博物館研究報告「共同研究」日本における民俗研究の形成と発展に関する基礎研究〕第一六五集 二〇一一年三月 国立歴史民俗博物館 B5判 当該総頁一八五頁）

存命中に刊行された書物と、没後に出版された書物があります。前者の書物は管見に入つたすべてを、後者は精選をして、柳田國男の著書・共著書、論文・記事・作品・談話・書簡などを収めている、全集・叢書・単行書など七五二冊を収載しました。

なお、岩波・角川・創元・新潮・旺文社・ちくま・講談社の各文庫に収められている書目と、教科書・辞（事）典は除きました。

取り上げた個々の書物については、書名、発行年月日、発行所・出版社、著書・他者の編著書の別、判型、本文頁（総頁）、序文・跋文について記述をし、若干の事柄を「備考」として記しました。

〔先祖の話』の執筆と刊行〕〔新訂 先祖の話』所収 二〇〇八年八月 石文社）

『定本柳田國男集』（別巻五 筑摩書房）の「年譜」に、「昭和十八年十一月二日、原町田に散歩、土地の材木商

陸川某に会い、先祖になるといふ話を聞く」と記されており、この出会いこそが、同書を執筆する動機となり契機となったと考えられています。

先に、『先祖の話』朱筆本校訂一覧―大月松二「柳田國男聴書」を受けて」の稿で、著者柳田國男の所蔵本に自身による数多くの書き込みが為されている旨を記しました。改めて数えるとその数は、「自序」と全八十一項目（章）の中の五十九項目（章）に及んでいるのです。

拙稿は、新訂版の刊行に当たり、校閲の任を委嘱され巻末に記したのですが、戦時下の昭和十九年・二〇年に書き続けられた『炭焼日記』の中に、本書を公刊するに至る著者柳田國男の心模様を辿り、加えて戦時下に高弟の丸山久子によって日記の清書（浄書）が逐一行われていたこと、終戦後同稿を出版するに至った心模様などを機軸として、『炭焼日記』に見る執筆の経緯、丸山久子の証言、大月松二の記録に見る執筆者の心境、柳田による朱筆書き入れ、後に出版をされた『先祖の話』の諸本、などの項目の下に記したのです。

『柳田國男の絵葉書―家族にあてた二七〇通』（二〇〇五年六月 晶文社 B5版 三三二頁）

柳田國男は、多くの日々を旅先で過ごしました。本書は、その旅先から家族に宛てて書き送った二七〇通のはがきや手紙を、一葉づつ写真に撮り、文面を判読し、文面と直接・間接に関係をしている事柄や類縁のことなどの短い解説文を付記し、巻末に柳田富美子（柳田國男長男為正夫人）の「絵はがきの心」、「柳田國男旅と絵葉書」と題した「編者解説」、「参考文献」「収載手簡一覧」などを付して一書としたものです。

因に、収載をした絵葉書は国内編（明治時代・大正時代・昭和時代）と国外編（大正六年・大正十年・大正十一年・大正十二年）とから成っています。大正六年は二ヵ月あまりに及んだ台湾・支那・朝鮮への旅行。大正十一年と十二年のそれは、国際連盟委任統治委員会の委員として二度にわたって渡欧をした折の旅行で、訪れた先のヨーロッパ各地をまわって見聞を重ねたり、思考をした跡などが随所に綴られています。その限りでは書目を主題とする本稿とは異なりますが、短い文面の中に家族に寄せた心遣いが、また知られていない

旅の足跡などが数多く記され、本稿の主題と重なる事柄や柳田國男の思考が伺われる記述も含まれており、ここに併せて付記させていただきました。

八 おわりに

机上に『日本近代書誌学細見』（谷沢永一 二〇〇三年一月 和泉書院）と言う本があります。著者は高名な国文学者・文芸評論家・書誌学者で、二〇一一年に故人となりました。同書に付された帯に「書誌学とは何か、明確な定義がない。殊に明治以後の文献を扱う方法が確立していない」「斯学の今後に進むべき道を読者とともに探ろうとする」などの言葉が綴られ、書中で詳細に説かれています。

同書は書誌学者谷沢永一が有する観点から、七〇人を超える書誌学者・研究者・篤志家の方々を挙げ、一人一人の業績に数頁を充てて言辭が記されています。筆者の名前も、その中にあり、『柳田國男 書目書影集覽』『柳田國男の書物』に関わる言辭が付されています。

「書影という言葉は、書誌学関係にも一般辞書にも、どうやら登録されていないようなので、後に述べる田中正明の用い方に倣うとする」「この厄介な刊記の処理を案じて、記録の方法を解決したのが、田中正明の『柳田國男 書目書影集覽』（平成六年）である。まさしくクロンプスの卵であつて、刊記そのものを写真にとつて、当該書の横または下に組む。これなら現物を手にしているのと同じに変わらないから頼りになる。それとは別に主題とする書誌学的注記を加えて行き届いている。ただし田中正明は終始書誌学的観点からの要領に限定し、内容については簡潔に言及を避けている。『時代ト農政』に表紙が緑色の本と、茶褐色の本との、二種類がある、という風に僅かな差をも見逃さない。」

『集覧』が禁欲的な記録に徹したゆえであるか、『柳田國男の書物』（平成一五年）には、著者が柳田研究の間に得た興味ある知見が充滿している。近年流行の無内容な気分だけの書物雑談とは姿勢を異にする」

過ぎた評価を頂戴をして面はゆいのですが、調べ事をしたり執筆をするに当たって、常に心掛けて来た留意点で、思いを新たに致しました。

なお、柳田國男の著書・著述を主題とした書冊ではありませんが、『柳田國男 私の歩んで来た道』（二〇〇〇年一〇月 岩田書院 A五版 四三六頁）、『柳田國男と本郷・小石川―ゆかりの迹を求めて―』（二〇一九年二月 開成出版 B五版 一四二頁）の二書にも、若干抵触をする記述があります。

以上、所蔵をしておりました「柳田國男の著書・著作を収載している書冊」を、受納して頂く縁を得、向後これらの書冊が活用されることを念じ、思いつくままに少し許かりの拙文を綴らせて頂きました。

付記

西暦と和暦、書名及び引用文中の柳田國男・柳田國男の表記は、記されている通りとしました。

（元二松学舎大学国際政治経済学部講師）